

観光振興と地域振興との統合的連携を進める「北海道地域観光学会」の設立 北海道における観光振興パラダイムの刷新をめざして



伊藤 昭男 (いとう あきお)
北海商科大学商学部教授

1957年北海道生まれ。北海道大学大学院環境科学研究科博士課程修了、博士(環境科学)。研究領域は地域観光論、地域政策論、東アジア地域研究論。北海商科大学学術発展センター長、北海学園北東アジア研究交流センター(HINAS) 研究員、北海商科大学開発政策研究所(DPRI) 研究員、長崎県立大学東アジア研究所連携研究員を兼務。北海道地域観光学会会長。近著に『現代中国の資源戦略－資源の再考察と資源化のダイナミクス－』(2012年)。

本年5月11日、北海商科大学開発政策研究所において「北海道地域観光学会」の設立総会と記念講演会が開催された。すでに多くの観光関連学会が設立されている中、今なぜ「北海道地域観光学会」なのか。

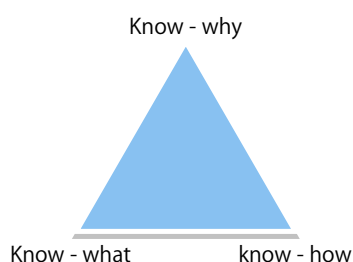
観光振興パラダイムの転換をめざして

本学会がめざすところは、これまでの観光入込客の増加や観光消費額の増大のみを目的とするような近視眼的観光振興ではなく、観光振興が地域や地方都市・マチにおける既存の他産業と十分連関しているのか、また住みやすさや魅力といった社会・文化面の向上に寄与しているのかといった、地域・地方都市・マチといった“場”の中長期的な生活・産業環境条件と乖離しない統合的連携を考察するところにある。

逆説的に言えば、これまでの観光振興は、観光面に重きが置かれすぎていて、産業、文化・芸術、都市計画、国際交流、福祉といった諸分野との統合的連携から効果的な観光イノベーションを見出す視点が弱かった。すなわち、“観光とは脇役”という従来の観光振興の発想(ここでは観光振興の全般的考え方を観光振興パラダイムと称する)から脱却できておらず、地域が今後突入せざるを得ない状況を取らねば、かつ飛躍し得る観光振興へとシフトできずにいるという重大な課題を抱えている。今、北海道観光において真に求められているのは、観光振興のイノベーションであり、そのためには観光振興パラダイムの思い切った「刷新」、加えて地域の個性・特性・固有性を最大限に引き出した地域振興とのインテグレイティブ・イノベーションの創造が必要である。北海道地域観光学会が探すべき本質的課題もここに存在する。

なお、ここで言う観光振興パラダイムとは、次図に示すように3つの視点を総合化した観光振興の考え方である。

ここで、Know-whyの視点とは、なぜそうした観光振興が必要なのかという考え方、Know-whatの視点とは、それではどんな観光振興が必要であるかとい



観光振興パラダイムの3つの視点

う考え方、Know-howの視点とは、それではどのようにしてそうした観光振興を行うのかという考え方である。これからの北海道における「観光振興パラダイムの刷新」とは、時代の先を見据え、かつ、世界的視点の中で北海道のあるべき観光振興を、地域振興との統合的観点から位置づけ・創造していくことにほかならない。

北海道地域観光学会の活動内容

① 学会の組織・運営上の特色

本学会は、先に述べたように北海道の観光振興を魅力と活力を有した北海道の地域づくりに結びつけることをめざすべく、学術性を核としながらも研究者・行政関係者・観光ビジネス関係者・市民・学生が連携をとりながら、考察・探求する「場」として組織したものである。本学会の組織・運営上の特色は、次のとおりである。

- 1) 観光が学際性および、理論と実践との緊密なフィードバック性が求められる研究分野であることから、従来の学会における「学」中心ではなく、「産」「官」「市民」「学生」が結集し得る組織（「場」の形成）とした。
- 2) 学会会費を大幅に減額し、コスト・レスな学会運営とした（年会費に会員格差を設けず、一律どなたでも2,000円とし、入会金は無料とした）。このため、連絡手段は原則Email（郵送せず）、学会誌は電子版のみ等にするなど、学会運営事務作業およびコストの大幅な簡素化を図ることとした。

② 学会の事業について

学会運営としては、次の事業を計画・実施中である。

1) 電子学会誌

電子学会誌の発行に向けて、学会設立後、編集委員会の組織体制および投稿規定を検討していたが、このほど結果がまとまり、8月6日付けで現会員91名に呼びかけ、学会誌への投稿受付をスタートした。学会誌発行は年2回としている。特色は、研究論文の発表ばかりでなく、行政論文、ビジネス論文、市民・学生論文の投稿領域を設けたことであり、産・学・官・市民・学生がそれぞれの立場から北海道の観光振興を考える受け皿のプラットフォームとなることを意図している。なお、掲載決定は投稿領域別の編集小委員会によって行う（現在、投稿原稿を受付中）。

2) 年次学術総会

第1回年次学術総会を2014年6月ないし7月に開催する予定で準備中である。なお、内容は口頭学術発表に加えて、各種講演および産・学・官・市民・学生によるフォーラムのような新形式の発表の場を設けることを検討している。

3) その他、漸次必要な事業を企画・実施していく予定である。

本学会の目標と期待

設立したばかりの学会であるが、本学会が「北海道の観光振興パラダイムの刷新」と「地域振興とのインテグレイティブ・イノベーション」に寄与することが目標である。高い潜在力を有している北海道が近頃沈滞傾向にあるのは、パラダイムや発想の「刷新」をしようとしないうちに多くの原因がある。今や「世界の中での北海道」を考え・実践しなければならない時代である。会員諸氏の「知力の刷新」に期待している。